

保育者養成課程における子育て支援の実践力を育成
する授業実践：
リアリスティック・アプローチに基づくカリキュラ
ムを通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 美佐, 山本, 一成, 宮城, 由美 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4434

保育者養成課程における子育て支援の実践力を育成する授業実践 —リアリスティック・アプローチに基づくカリキュラムを通して—

児童教育学部 児童教育学科 中山 美佐
滋賀大学 教育学部 学校教育教員養成課程 山本 一成
東大阪市 子どもすこやか部 宮城 由美

要旨：保育者養成課程において「子育て支援」の実践力を育成するカリキュラムの整備が求められている。本研究では、リアリスティック・アプローチを用いてカリキュラムを設計し、学生の学びについて検証した。授業は学生自身が行う子育て支援と、その事前・事後指導からなり、「5段階の手順」によって学生の経験からの学びを引き出すことが目指された。学生のアンケートの分析から、学生は実際に母親と接し、子育ての悩みや喜びについて対話することによって、机上の学習では得ることのできないリアリティある学びを得ていることが明らかになった。

キーワード：子育て支援、保育者養成、リアリスティック・アプローチ、リアリティ・ショック

はじめに

子育ての孤立化や子どもの貧困、虐待の問題など、子育てに関する問題が大きく取り上げられるなか、保育所や幼稚園等に求められる子育て支援の役割が大きくなっている。2018年に改訂された保育所保育指針においては「子育て支援」の章が新設され、「子どもの育ちを家庭と連携して支援すること」、「保護者及び地域が有する子育てを自ら実践する力の向上」に資することが求められている。また、2019年より保育者養成課程における必修教科目として「子育て支援」が追加されるなど、実社会でのニーズが、保育に関する制度面においても反映されてきている現状にある。

このような状況のなかで、学生が「子育て支援」についてリアリティある学びを得るためには、どのようなカリキュラムが望ましいといえるのだろうか。本研究では、実践経験からの学習を導く理論としての「リアリスティック・アプローチ」(Korthagen2010)¹⁾を用いて授業計画を設計し、学生が実際の子育てについてリアリティある学びを得られているかどうかを検討することを目指した。

I 問題と目的

1. 「子育て支援」の独自性に基づくカリキュラムの必要性
社会全体での子育て支援が求められている現状のな

かで、大学が主体となった子育て支援の取り組みが広がりを見せている。小原ら(2016)²⁾が、保育者養成を行う大学が実施する子育て支援活動について調査した結果、調査に回答した189校のうち、約7割がなんらかの子育て支援を行っており、多くの大学が実際に子育て支援を担う主体となっていることがわかる。それらの実践には、何らかのかたちで学生が関与するケースが多く、保育者養成課程のなかで学生が実際に子育て支援の現場を身近に感じることでできる機会も増えてきているといえるのではないかな。

一方、子育て支援についての実践的な知識を身につける教育カリキュラムの開発は、いまだ手探りの状態である。立浪(2013)³⁾は、保育者養成課程において、学生自身が子育て支援の経験を学びにつなげるカリキュラムを整備する必要性を訴えているが、そのようなカリキュラムの理論化・体系化は十分になされていると言えないだろう。

子育て支援について学ぶカリキュラムを構築する上で必要になるのが、「保育」と「子育て」の区別である。保育者養成課程において学ぶ「保育」は、主に集団を対象とした施設保育の実践を想定したものであり、主に親子関係のなかで営まれる「子育て」とはそのリアリティが異なっている。「保育」を想定して得られた子ども観のみに基づいて、いきなり保育者として子育て支援の実践に挑むことは、近年保育者養成の課題として指摘されている「リアリティ・ショック」(谷

川 2010)⁴⁾の問題、すなわち養成課程で学んだ知識・技術の実際性と現場で求められる対応の実際性との乖離から生じる問題を引き起こすことが想定できる。そのようなショックを緩和する上で、「わが子」を育てる悩みや喜びといった、「子育て」独自のリアリティの存在に、ある程度の理解を備えた保育者を養成する必要があるといえるだろう。

2. 「リアリスティック・アプローチ」に基づく学び

保育者養成校において子育て支援の現場が身近になっていることを鑑みれば、そのような現場での経験をより豊かな学びに結び付けていくための教育方法論が求められている。そこで本研究が注目するのは、オランダの教育学者・教師教育者であるフレッド・コルトハーゲンが提唱する「リアリスティック・アプローチ」である。「リアリスティック・アプローチ」とは、経験に依拠した学びの理論であり、実践場面のリアリティを重視し、その場で起きていることや、自分自身の行為によってもたらされた影響について振り返りを行い、そこに意義や意味を見出していくことで学習を行っていくアプローチである(小野寺ら 2016)⁵⁾。これまで、「教育実習」や「教職実践演習」といった教員養成課程の科目において「リアリスティック・アプローチ」を導入した実践研究が行われており、現場のリアリティに基づく学びを導くものとしてその意義が論じられている(山本ら 2016⁶⁾、中山ら 2017⁷⁾)。「子育て」独自のリアリティに基づくカリキュラムを構築する上でも、このようなアプローチを採用していくことが有効であろうと考えられる。

3. 本研究の目的

そこで本研究では、子育て支援について学ぶカリキュラム構築のための実践研究として、保育者養成校である大阪樟蔭女子大学児童学部において、実際に学生とともに子育て支援実践を行い、その経験から学びを引き出すことを目的とした授業実践を行った。子育て支援実践として行われたのは、筆者らが2015年より大学内で実施してきた「子育てカフェ」である。「子育てカフェ」は、「地域の子育て中の保護者が気軽に来場し、子育てについての話ができる場所」をコンセプトとして大阪樟蔭女子大学にて行われてきた子育て支援の取り組みであり、東大阪市との協働企画として2015年に始まって以来、毎年継続されている(山本・中山 2018)⁸⁾。

本研究では、大阪樟蔭女子大学児童学部3年生15

名が履修した「演習Ⅱ」の授業で「子育てカフェ」を実施した。全15回の授業のうち11回について、後述する「5段階の手順」を用いて設計し、計3回実施した「子育てカフェ」のなかで、学生のリアリスティックな学びを引き出していくことを目指した。

Ⅱ 方法

先述したように、本研究の目的は「リアリスティック・アプローチ」の手法を用いて、「子育て」のリアリティに基づく「子育て支援」についての学びを引き出すカリキュラムを開発することにある。そのために、「5段階の手順」と呼ばれる「リアリスティック・アプローチ」の手法を採用した授業計画を行った。

計3回行われた「子育てカフェ」のうち、初回と2回目では、東大阪市との協働企画という特色を生かし、東大阪市の子育て支援センターで所長を務める宮城(第3著者)が、「子育てテーマトーク」を行い、プロの子育て支援者による支援活動がその場で学生にも体験できるような工夫を行った。さらに、学生と参加者の母親が対話を行う時間を設け、学生が「子育て」の実際を体験的に学ぶための工夫を行った。3回目の子育てカフェでは、カリキュラムの仕上げとして、学生自身が企画から運営までをすべて担当した(造形活動やチェキ(インスタントカメラ)での親子写真撮影など)。以下、「5段階の手順」と「子育てテーマトーク」の詳細について記す。

1. 「5段階の手順」を用いたカリキュラム設計

本研究では、全11回の授業のうち、第3回、第6回、第10回の授業において学生が実際に子育てカフェを運営し、それぞれの回に事前指導、事後指導を設けるかたちをとった。また、第8回目の授業においては、宮城が特別講義を行い、学生の実践的な学びを補強している。実践と事後指導(リフレクション)を期間内に3フェーズ繰り返すことによって、各フェーズの経験の蓄積とその省察から学びを得られるようにする工夫を行っている(図1)。

このカリキュラムは、「5段階の手順」によって設計されている。「5段階」とは「Ⅰ事前構造化」、「Ⅱ経験」、「Ⅲ構造化」、「Ⅳ焦点化」、「Ⅴ小文字の理論」という5つの段階を指し、これらの段階を経ることを通して、学習者の経験から学びを引き出していく手法を指す(Korthagen2010)⁹⁾。「Ⅴ小文字の理論」とは、学習者が自身の経験から引き出した気付きや学びを指

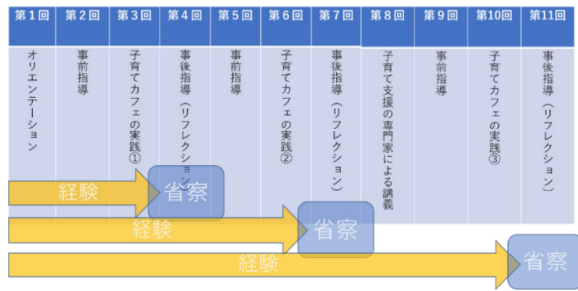


図1 全11回の授業の概要

し、この段階に到達することを目指して残りの4段階が設計される。教師はまず、「I事前構造化」の段階で、「V小文字の理論」の獲得につながることを意図した導入を行う。次に、学生の「II経験」を何らかの方法で「III構造化」「IV焦点化」するファシリテーションを行うことで、学習を援助していくというのが基本的な方法となる。

本研究では、計3回の「子育てカフェ」の事前指導の回に、次の「子育てカフェ」の実践に向けた学び「V小文字の理論」が得られるよう授業を設計している。また、「子育てカフェ」の事後指導の回には、前回の子育てカフェの「経験」を「構造化」「焦点化」し、実践に根差した「V小文字の理論」の学びが生じるような授業計画を行っている。図2と図3を用いながら、5段階の手順が各回の授業にどのように適用されているかを説明する。

図2は、第1回目と第2回目の授業が5段階のどの時点に位置づくかを図示したものである。第1回目と第2回目の授業は、第3回目の授業で行われる子育てカフェ（「II経験」）へ向けた「I事前構造化」の段階となっている（図の上段）。それと同時に、子育てカフェの実践へ向けた「V小文字の理論」を得ることを目的としてI、II、III、IVそれぞれの段階が設計されている（図の下段）。

つまり、初めての子育てカフェで得られる「予想と現実のギャップ」こそが、リアリティある学びにつながると考えられたため、「0～2歳の子どもに楽しんでもらうための環境構成を行い、予想と現実との差異を経験できるような準備状態を作る」「0～2歳の子どもをもつ保護者の生活についてイメージし、抱いたイメージと現実との差異を経験できるような準備状態を作る」ことを目指した事前構造化を第1回、第2回にて行い、それを第3回以降の学びにつなげているというイメージである。

第1回、第2回の授業でなされた事前構造化を受け、第3回目の授業では実際に子育て支援を「経験」

第3回の授業へ向けた事前構造化				
・0～2歳の子どもに楽しんでもらうための環境構成を行い、予想と現実との差異を経験できるような準備状態を作る				
・0～2歳の子どもをもつ保護者の生活についてイメージし、抱いたイメージと現実との差異を経験できるような準備状態を作る				
第1回 <オリエンテーション>	第2回 <事前指導①>			
(事前構造化) ・「0～2歳の子どもの日々についての実情的なイメージをきかせる人?」という問いかけを行い、乳幼児の親子のイメージを喚起する ・自分が責任をもって子育て支援の実践を行うつもりで、次回までに必要な情報を調べておくことを伝える	II (経験) ・育児で0～2歳の子どもとの発達について調べてくる ・育児で0～2歳の子どもとの発達について発表する	III (構造化) ・0～2歳の子どもの発達について発表する ・0～2歳の保護者の子育ての喜びと悩みについて発表する	IV (焦点化) ・「0～2歳の子どもの発達について発表する」と「0～2歳の保護者の子育ての喜びと悩みについて発表する」を聞きながら、他の学生の発表から他の学生の発表を聞き、グループの意見をまとめる	V (小文字の理論) ・0～2歳の子どもの発達環境を考えた場合、0～2歳の子どもの発達環境を考えた場合、0～2歳の子どもの発達環境を考えた場合、0～2歳の子どもの発達環境を考えた場合、0～2歳の子どもの発達環境を考えた場合

図2 第3回目以降への事前構造化（上段）としての、第1回・第2回の授業の5段階の構造（下段）

第5回の授業に向けた事前構造化				
初めての子育てカフェで得られた学びを具体的な行為の選択肢の拡大に生かす準備状態をつくる				
第3回 <子育てカフェ①>	第4回 <事後指導①>			
II (経験) ・子育てカフェを実践し、0～2歳の子どもの動きや興味関心について知る ・子育てカフェを実践し、保護者の喜びや悩みについて知る	III (構造化) ・「子どもたちの様子や自分たちの環境構成はどうだったか」について、ワークシートを用いたりフレキシションを行い、グループ内で共有する ・「イメージしていた子育てと同じだったこと、違っていたこと」について、ワークシートを用いたりフレキシションを行い、グループ内で共有する	IV (焦点化) ・ホワイトボードにそれぞれのグループの内容を書き出し、前回の良かったところと改善できるところをまとめる	V (小文字の理論) ・環境構成の良かったところと改善点について具体的に考えられる ・どのような子育て支援が必要かについて視野を広げて再考する	

図3 第5回目以降への事前構造化（上段）としての、第3回・第4回の授業の5段階の構造（下段）

する。そして、その「経験」について、第4回目の授業で「構造化」「焦点化」し、「小文字の理論」の学びを得ることを目指した。

さらに、この第3回、第4回の授業が、第5回の事前指導に向けた「事前構造化」となる、といったように、5段階が重層的に組み合わせられていくように授業が計画されている。具体的に言えば、第3回、第4回の授業は、第6回の事前指導において、「初めての子育てカフェで得られた学びを具体的な行為の選択肢の拡大に生かす準備状態をつくる」ための事前構造化となっている。

以下、紙幅の関係から、第5回以降の各回の授業のなかに「5段階の手順」がどのように反映されているかについては省略するが、全11回の授業のなかで学生がリアリティある学びが得られるよう、5段階を重層化しながら学びを深めていく授業構成が行われている点が重要である。

2. 「子育てカフェ」におけるテーマトークの概要

第1回目と第2回目の子育てカフェにおいては、学生が実際にプロの子育て支援に触れることを重視し、第3著者である宮城がテーマトークを行い、学生はその時間、宮城と保護者とのやりとりを観察しつつ、サポートする役割を担った。以下、テーマトークの概要を示す。

<テーマトークの概要>

子どもの保育を保障しながら、保護者の子育ての悩みや不安などを解消するため学生と共催で『イヤイヤ期の対応』の議題でテーマトークを行った。核家族、兄弟が少ない、地域とのつながりが希薄な時代の中で、親トレーニング（乳幼児と関わるチャンスがなく、赤ちゃんをさわるのはわが子が初めて）がないままに、親になる保護者が多い。虐待予防を念頭におき、孤立した子育て家庭を減らし、保護者の不安や悩みを解消して安心して子育てが出来る、すなわち、子どもたちの心と体がすこやかに育つことを目的としている。

保護者の不安や悩みを話してもらい、参加者で共有、「悩んでいるのは、自分だけではない」事を確認する。保護者の不安や悩みに寄り添い、共感した後、『子どもの時期的なこと』『年齢的な見通し』『今出来る具体的な対応』を、アタッチメントの形成が重要であることに、ポイントをおきながら伝える。

「発達がわからない」「自分の時間をとられて、身動きがとりにくい」「一人で子育てしていると、世の中から取り残されたような孤独感、不安感を感じる」などの保護者のストレスは、子どもへ直撃する。子育ての大変さを理解し、協力してくれる人が周りにたった一人いるだけで、そのストレスは解消に向かい、保護者自身も守られる。結果、保護者は安心して子どもとのアタッチメントの形成に向かっていくことが出来る。

学生は、保護者の悩みなどを知ることで、育児中の保護者の理解をすることができる。その保護者への寄り添い、共感など、具体的なアドバイスなどの対応を直接見てもらうことで、学生の今後の保育や子育て支援のスキルアップができる。

3. 調査対象・質問内容

本研究の調査対象は「演習Ⅱ」の参加学生（3回生）15名である。学生には事前に研究目的と研究データの使用方法、個人情報保護について説明を行い、研究協力への承諾を得た。また、研究の手続きについては事前に大阪樟蔭女子大学研究倫理委員会に申請し、実施の許可を得ている。

表1 子育てカフェ学生アンケート

1.お母さんからの話は良かったですか？(1つに○) とても良かった 少し良かった どちらでもない あまり良くなかった 良くなかった
2.聞いてみて良かった内容はありますか？○を付けて下さい(複数可) 出産について 子育ての楽しさについて 子育ての大変さについて お母さんのお子への想いについて 親子のかわり方について 子どもの成長について 発達の違いについて 個人差について その他()
3.お母さん方の話から感じたこと、学んだことは何ですか？ ①お母さんは子育てに頑張っていると思いましたか？(1つに○) とても思う 思う どちらでもない 思わない ②子育て支援は必要だと思いましたか？(1つに○) とても思う 思う どちらでもない 思わない ③子育て支援についてもっと学びたいと思いましたか？(1つに○) とても思う 思う どちらでもない 思わない ④乳幼児の親子のかわり方や、子どもの発達についてもっと学びたいと思いましたか？(1つに○) とても思う 思う どちらでもない 思わない ⑤今後、保育者になるには、入園前の親子の様子も知る必要があると思いましたか？(1つに○) とても思う 思う どちらでもない 思わない ⑥保育者として子どもを預かるときに、お母さん方との連携は必要だと思いましたか？(1つに○) とても思う 思う どちらでもない 思わない ⑦自分自身も母親になりたいと思いましたか？(1つに○)
4.今後、求められる子育て支援は何だと思いますか？
5.思ったこと、感じたこと考えたことなど自由に記入してください。

学生には「子育てカフェに参加して良かったか」「母親から話を聞くことで良かったこと」「話を聞いて学んだこと」等についてアンケートを行った。アンケートは「子育てカフェ」実施後、3回行った。(表1)

4. 分析方法

質問内容で○をつけてもらう回答方法のものにはパーセンテージを算出し、4段階、5段階評価のものには平均値を算出した。また、自由記述の部分は質的分析SCAT (Steps for Coding and Theorization) 法を使用した。これは大谷 (2007)¹⁰⁾により提唱されたグラウンデッド・セオリー法を基にした方法である。この方法は記載された内容を、より一般的な表現へと転換する4ステップのコーディング及び、コーディングデータから一般的な理論を導きだそうとする手続きから構成される。SCATは自由記述をより丁寧に分析し、また理論に導くことができる手法であり、自由記述分析についてはこの手法を用いることとした。

III 結果と考察

1. 問1~3について

(1) 問1~3について

質問1では第1回から3回まで全員が「とても良かった」と答えており5段階評価で5である。ほとんど未就園児やその母親とかかわったことのない学生にとって、とても良い経験になったと全員が思ったと考えられる。

質問2について、全3回分のパーセンテージ平均をとって図示した(図4)。第1回から第3回に参加し、学生たちは、子育ての大変さを感じたり学び取ったり

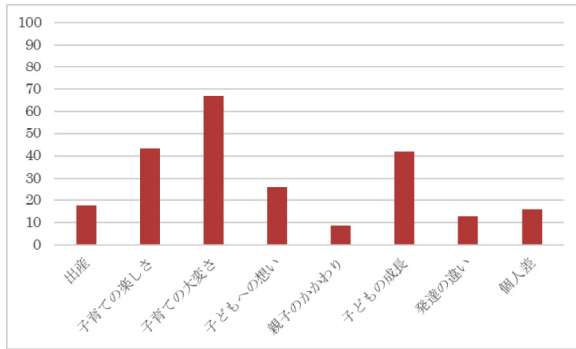


図4 質問2 母親から聞いて良かった内容 (第1回から第3回平均)

している。母親の話では「子育ての大変さについて」が一番多かったが、「子育ての楽しさ」についても多くの学生が感じ取っている。学生たちは、母親たちが子育てをしんどい、苦しいと思っていることを理解した一方で、子育てが楽しいと思っているとも感じていると読み取れる。「子どもへの想い」は学生にはやや伝わりにくかったのかと推察されるが、「子どもの成長」については伝わっていたと考察できる。

質問3については、図5のとおりである。問3-1について3回共に全員がお母さんは頑張っていると答えている。身近で母親の様子を見ていて、また、話を聞いて、お母さんたちはみんな全員が精いっぱい頑張っていると思ったのだと考えられる。問3-2について3.8から4と多くの学生が子育て支援について必要だと思うと答えており、親子と触れ合い、話すことによって、大切だと考えたと思われる。問3-3について3.7から3.8とほとんどの学生が、学びたいとすることがわかる。問3-4については3.9から4とかなり多くの学生がもっと学びたいと答えている。問3-3と問3-4を比べてみると、学生は、支援について学びたい意欲を持っているが、それ以上に親子のかかわりや発達の具体的な姿に関心を持っていることがわかる。乳児の親子のかかわり方については、実際の親子をまえに学ぶ機会はほとんどないので、学べる機会があればもっと学びたいと考えていることがわかる。問3-5については3.7から4と回を重ねるごとに増えていき、最終回には全員が入園前の親子の様子を知る必要があると答えている。保育者は入園した子どもやその母親を見ることはできるが、入園前の様子を見ることは難しく、入園面の段階の親子について知っておきたいと思ったと思われる。問3-6について全員が保育者とお母さんの連携は大切と答えている。学生はこれ以前に、保育所実習を経験していることもあり、保育者とお母さんの連携無くしては、ともに子どもを育

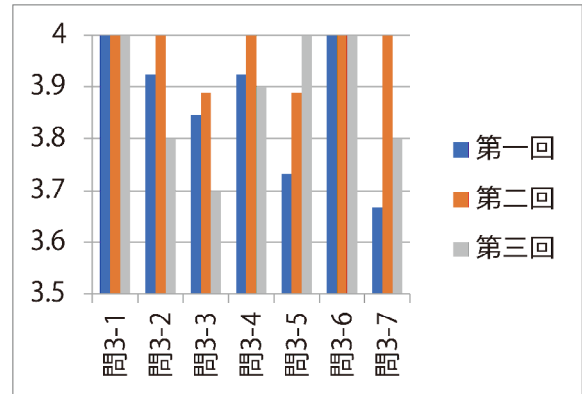


図5 問3-1から問3-7 学生アンケート結果

てていくことはできないと感じていると考えられる。問3-7については図5のようにばらつきがみられる。保育者になりたい学生は子どもが好きで、自分の子どもを産みたい、欲しいと全員が思っていると予想したが、全員が絶対に子どもが欲しいと思っていないことがわかる。数人ではあるがどちらでもないと答えており、仕事として保育者をして、実際、自分が子どもを欲しいかどうかは別であると考えていると推察される。

2. 問5 自由記述についての SCAT 分析

問5の自由記述について SCAT による分析を行った。分析には4ステップコーディングの手法を用いている。具体的には、アンケートの自由記載のテキストから (1) テキストの中で注目すべき語句、(2) テキスト内の語句の言い換え、(3) 左記の (2) を説明するようなテキスト外の概念の導入、(4) テーマ、構成概念 (疑問)、課題へとコーディングを行った。全データを記載すべきところであるが、紙面の都合上、まずストーリーラインと理論記述 (表2) のみ掲載する。

<分析>

分析結果について以下に記述する。

第1回目の子育てカフェでは学生のテキストには「子育ては大変だと思ったけどそれ以上に子どもが可愛くとても楽しくて、早く子どもが欲しいと思いました。」と記載があり、実際の親子と少しかかわることで子育てはたいへんだろうけれども、早く自分も早く母親になりたい、子どもを産みたいと思ったことがわかる。少しのかかわりでは安易に子どもが育てられると思う学生がいたことがわかる。しかし、しっかり母親や子どもとかかわりあい、話を聞いた学生からは、「子育ての大変さはわかっているつもりだったがお母さん方の話を聞いて悩みだけでなく怖さがあったり

表2 第1回から第3回の子育てカフェ、ストーリーライン（抜粋）と理論記述

ストーリーライン	理論記述
<p>第1回子育てカフェを体験した学生アンケートから、実際に親子と接する機会が少ない学生は、母親の子育ての大変さに、気付かない。そのため、子どもの可愛さだけで早く子どもが欲しいと思う安易さを持っている。また、実際に母親と話してみても、学生は子育てについて学んでいない。分かっているつもりであったが、実際の母親から聞く子育ての大変さとの差異の大きさや、母親の子どもへの愛情の深さに気付いている。また机上で学んで想像していたことと、現実の母親から聞く子育ての違いへの違いへの気付きや、まだ起こっていないことにまで不安を抱き返す母親の苦悩の深さについての驚きをもっている。イヤイヤ期の話を聞いた学生は、イヤイヤ期一つとっても、実際の母親からの話はリアルでみんな違うことを学生は学んでいる。第2回子育てカフェを体験した学生たちはさらに学びを深めている。学生が母親と何度も話してわかることは、本当の子育ての良さや子育ての苦しきである。子育てを一人で行うこともあり、苦しい孤育てや、その苦しみを語れない環境にもその辛さはあると考えられている。語る人のなさ、苦しきさは子育てをよりしんどいものにしていて思っている。学生にとって母親との話では、母親の悩みに対応できない苦しき、何もできない学生の姿があった。実際の子育てを知ることで体験が少ない学生には、大学での学びとは違う内容、個々の違い、体験による学びがあったと思われる。母親同士のかかわりも必要だと、実際に聞いてわかる学びが子育てカフェにはあったと思われる。第3回子育てカフェを経験した学生は、実際に自分たちが企画・運営をしてみても学んだことも多かったと思われる。実際に学生が企画、運営する機会が少ない学生にとって、机上の学びと実際に実行することの違いが学べたと思われる。実際に親子の前に立つことからの学び、また、机上の学びと実際に実行することの違いに気付けたであろう。学生だからできること考え付くことも多いと思われる。スマホ時代である現代、データの多さはあっても、実物の写真の少なさに気付き、学生ならではの発想で写真を撮って思い出の品として親子にプレゼントをした。母親からも喜びの声があった。機会がなければ親子とのかかわりが少ない学生、実際にかかわる体験の少ない学生にとって、子どもの個々の成長や、子どもと離れたことのない母親の不安を聞いたりする経験、実際の母親から聞くことからの学びは机上ではわからない学びであると思われる。経験の大切さ、机上での学びに無い母親の語り大切さが学生の学びに繋がると考えられる。聞く体験の少ない学生にとって、母親の体験を聞く学びは今後も大切であろう。子育てカフェで親子とかわり、もっとかわり、もっと聞きたいと思う学生も多いと思われる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学生たちは、実際に親子とかわること、思っていた子育てと実際の子育てとの違いに気付くことができる。 ・机上の学びからは得られない学びを得ることができる。(子どもの個々の違いや、母親の違い等) ・母親と話することで、母親の子育ての苦しきや辛さを知ることができる。 ・母親たちが子どもを愛していることに気付き、だからこそ、辛い子育てができると感じられている。 ・将来、自分が保育者になるにあたって、実際の親子とかわることが大きな学びになると学生は分かっている。 ・母親たちには母親同士の交流が必要であること、交流する場が必要であることを学生たちは学んでいる。 ・子育ての悩みを語る母親にどのように対応したらいいのかわからず、もっと学ぶ必要があると学生は感じている。 ・実際に親子の前で子育てカフェをしてみても、保育者として時間や、かわり方、設定の仕方などが学んでいる。 ・企画・運営・準備等を学生たちで行うことに喜びや楽しさのほかに、失敗や学びがあり、経験することの大切さ、経験することからの学びを得ている。 ・してもらおう子育てカフェから、自分たちで行う子育てカフェの面白さに気付き、失敗したことを今後に活かそうと思っている。前向きに子育てカフェに取り組もうとする姿がわかる。 ・スマホの普及により子どもの写真はデータとしてはたくさんあるが、実際の写真はあまりないことに学生たちは気が付いている。母親たちが実際の写真が欲しいことにも気が付いている。 ・子育てカフェで親子と交流することをきっかけにして、自分の地域で親子とかわることの大切さに気付き、学んだ学生もいる。

と知っている大変さよりも大きいものだった。しんどさもあるがその子どもに対する想いがあるからこそ、子育てができるのだと思った。」あるいは、「お母さんたちにお話を伺った時一番の悩みはなにかと聞くと今の悩みもたくさんあるけど先のまだ起こっていないことの不安がたくさんあると涙を流すお母さんもいらっしや私たちが考えている以上に悩みの内容は幅広く深いんだと感じました。生の声を聞くことで自分の知らない現実を見ることができてとても良い経験になりました。」といった記載があり、実際の「子育て」の大変さについて理解できている学生もいると思われる。また、「イヤイヤ期のリアルな悩みをたくさん聞くことができてとてもためになった。自分が保育の現場で働いたとき、子育てをする立場になったとき参考になると思った。今回はイヤイヤ期についてお話を聞きましたがそれぞれの年齢や子どもによってイヤイヤ期の違いがあり発達に応じて、様々な対応が必要だと感じました。」といった記載もあり、イヤイヤ期も親子に話を聞くと個々によって違うことや、保育者になった時にはイヤイヤ期もあることを理解できたことを学べたことをよかったと思っていることがわかる。

第2回目の子育てカフェ学生テキストには「お母さん方の子育ての喜び大変さというものを身近にお話を聞くことができたのでとても良い経験ができたなと思いました。お母さんたちと直接話してみても子育ての良さや楽しさをさらに聞くことができました。」と記載があり、1回目よりもさらに子育てについて聞けたと記載している。また、「子どもが泣いていると不安になるとき1人で悩むのではなく周りの人たちに相談することが大切だと思った。少しでも1人の時間が欲しいということや出産後の保護者との交流など実際に聞かないとわからないことをたくさん聞けたので参考になった。」と、子育て支援の内容について気付きを深めた学生もいる。

第3回目の子育てカフェ学生テキストには「自分たちが企画した子育てカフェは、今まで以上に保護者の方々、子どもとかわることができて良かった。楽しかった。製作してみてもうまくいった部分と反省しなければいけない点などあったので今後に役立てていきたいと思いました。また、子育てカフェでいろいろな子ども達とのかかわりを増やし身近に交流を深めていきたいです。」といった記載もあり、自分たちで初めか

ら企画・運営する子育てカフェの難しさや、面白さ、楽しさ、反省点も踏まえながら、今後さらに多くの子どもとかかわり交流を深めておきたいと前向きに考える学生もいた。また、「今日、自分たちで子育てカフェをしてみて自分たちだからこそできた活動もあると思うので、また違った子育てカフェが提供できて良かった。うまくいかないことやスムーズにできなかったところは次の活動に活かしていきたい。今回1から自分たちで考えていって、製作などもお母さんと楽しんで取り組んでくれて良かったと感じる。チェキもお母さんと一緒に写っている思い出の品として喜んでくれたのでとても良かったと感じる。」と、学生だからできる子育てカフェに自信を持った学生、母親からの喜びの声に、また前向きに頑張りたいといった意欲も感じられた。

3. 考察

学生たちは、実習で子ども達とかかわり保育の現場で学ぶ経験はしているが、未就園児や、その母親とかかわる機会はほとんどないと言えるだろう。子育て支援を知らないといった学生も多いと思われる。そのような中で、「子育てカフェ」を経験することは大きな学びとなったであろう。今後保育者になっていく学生にとって、本来ならば経験しておかなければならないことかもしれない。机上では学べない母親の個々の様子や子育て観、母親の子どもへの想いや、子育てについての様々な悩みは少しでも経験を通して、学ぶ必要があると考えられる。保育者が子どもにかかわるとき、その母親にもかかわる必要があるだろう。母親がどんなことに悩み、どんなことを心配しているのかについて知ることや、悩みを受け止め、共に子どもを育てる姿勢なども必要であると考えられる。「子育て」のリアリティに触れながらも、「保育」と「子育て」は別々のものではなく、それぞれ共通する部分があること、また、共にかかわり合い、影響し合うことについて「子育てカフェ」をとおして、学生たちは気付くことができたのではないだろうか。

5段階の手順を用いて授業を行うことにより、第1回子育てカフェから第2回子育てカフェの実際の体験が、より大きく学生の学びにつながったといえるだろう。机上での学びにはない実際の体験を得、それを振り返ることによって、螺旋状に渦を巻くように次の学びにつながることができたと思われる。学生のアンケート分析から、1回目の子育てカフェでは、初めて聞く「子育て」の話に驚き、学生の思う子育てとの差異を

感じた様子がわかる。第2回目の分析では「子育て」には決まりがないこと、個々に違いがあることに気付き、支援に必要なことはどんなことなのかと考えていることがわかる。また、保育者として「保育」だけではなく「子育て」にも目を向けていることも大切だと気付いている。第3回目の分析では、学生自らが企画・運営することによって、自分たちにもできることがあると感じ、振り返りをすることによって、実際に子育て支援をする時にはどんなことに気を付けていくのか、どんな工夫が必要なのかを考えるとところまで学ぶことができたと言えるだろう。

学生は子育てカフェで実際の親子とかかわり、実際に母親の話を聞き、実際に子育てカフェを運営することで、想像したこととは違う現実を知り、学ぶことができたのではないだろうか。将来、保育者となっていく学生たちにとって、想像と現実の差異に気付けたことは、今後の机上の学びにも生かされていくであろう。リアリティ・ショックを学生のうちに経験できたことは、学生の成長につながったと思われる。保育者として現場に出る前に、母親の気持ちや子どもの様子を知る手掛かりの一つになったと考えられる。

終わりに

本研究では、「子育て」のリアリティに気付くことで学びを深めるカリキュラムとして、リアリスティック・アプローチを用いた授業計画が有効であることが示唆された。経験と省察からなる学びのサイクルをより有効に深めていく事前構造化や構造化、焦点化の手法について、より具体的に検証していくことが今後の課題になるだろう。また、今回は質的な分析を中心として学生の学びについて検討したが、量的な指標を用いて学生の変化を分析したり、カリキュラムの有効性を検討したりすることも今後の課題として必要であるといえるだろう。

子育て支援の必要性が高まるなかで、その専門性をより明確にし、高度な専門性を育成するカリキュラムを探究していくことが求められるといえるだろう。

謝辞

本研究は大阪樟蔭女子大学くすのき研究助成プログラムの支援を受けて実施されました。貴重な研究の機会をいただいたことに感謝いたします。なお、本研究のアンケート調査とその分析については、第一著者である中山が平成30年度に大阪総合保育大学大学院に提出した修士論文での分析を大幅に加筆・修正したも

のとなっています。本研究の分析にあたり御助言くださった大阪総合保育大学大学院渡辺俊太郎先生に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) Korthagen, F. (Ed.) (2001), *Linking Practice and theory The Pedagogy of Realistic Teacher Education*. NJ: Lawrence Erlbaum Associates, (=2010, 武田信子, 『教師教育学—理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』, 学文社)
- 2) 小原敏郎・中西利恵・直島正樹・石沢順子・三浦主博 (2016), 「保育者養成校がキャンパス内で行っている子育て支援活動に関する調査研究」, 『共立女子大学家政学部紀要』, 62, pp. 153-163.
- 3) 立浪澄子 (2013), 『実践力を育てる—学生主体の子育て支援を通して』, ななみ書房
- 4) 谷川夏実 (2010), 「幼稚園実習におけるリアリティ・ショックと保育に関する認識の変容」, 『保育学研究』, 48(2), pp. 96-106.
- 5) 小野寺香・村井尚子・中山美佐・濱谷佳奈・山本一成・坂田哲人 (2016), 「教員養成課程におけるリアリスティック・アプローチ導入の理念と意義」, 『大阪樟蔭女子大学研究紀要』, 6, pp. 81-89.
- 6) 山本一成・中山美佐・濱谷佳奈・小野寺香・村井尚子・坂田哲人 (2016), 「教員養成課程におけるリアリスティック・アプローチを導入した授業実践」, 『大阪樟蔭女子大学研究紀要』, 6, pp. 187-198.
- 7) 中山美佐・山本一成・濱谷佳奈・村井尚子・小野寺香・坂田哲人 (2017), 「リアリスティック・アプローチを用いた教職実践演習についての研究」, 『大阪樟蔭女子大学研究紀要』, 7, pp. 165-176.
- 8) 山本一成・中山美佐 (2018), 「保育者を目指す学生と子育て支援の専門家との協働についての考察—『子育てカフェ』における学生の実践的学びに注目して」, 『大阪樟蔭女子大学研究紀要』, 8, pp. 189-195.
- 9) Korthagen, F. 前掲書 p. 157.
- 10) 大谷尚 (2007), 「4ステップコーディングによる質的データ分析手法—着手しやすく小規模データにも適応可能な理論化の手続き—」, 『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』, 54(2), pp. 27-44.

Childcare Worker Training Program to Cultivate Practical Childcare Support Skills: A Curriculum Based on a Realistic Approach

Department and Faculty of Childhood Education, Osaka Shoin Women's University

Misa NAKAYAMA

Department of School Education, Faculty of Education, Shiga University

Issei YAMAMOTO

Higashi-Osaka City

Yumi MIYAGI

ABSTRACT

Recently, it has been observed that childcare worker training faculties need to improve their curriculum of practical childcare support. In this study, we took on a “realistic approach” in designing the curriculum of childcare support and found out what students are learning. In this curriculum, students operate childcare support programs which include dialogues between mothers of young children and themselves. We used a five-step procedure to design this curriculum. We began with a preparation session, followed by an experience and reflection session to promote students' learning. Finally, we analyzed the students' questionnaires and found that students acquired realistic knowledge and skills by sharing the joys and difficulties of childcare with mothers.

Keywords: childcare support, childcare worker training, realistic approach, reality shock